相模経済新聞　2020年7月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

26

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

生命の本質とは何か？

人間は考える葦である、これはフランスの哲学者パスカルの有名な言葉である。人間は、見かけは葦のように頼りないが、考えることによって様々な苦難を乗り越えることができるという。しかし、考えるのは人間だけではない。身近なイヌやネコも考える。山里のサルや都会のカラスと知恵くらべをしたら、人間が負けてしまうこともある。

ボノボ、ゴリラ、イルカなどは、音声や音波を使い分け、集団で高度な社会生活をしている。昆虫の中にはキノコを栽培するものもおり、ある種の植物は化学物質を発散させて情報交換を行い、粘菌は迷路を最短距離で埋め尽くす。身近な動物、植物、微生物の生態を観察すると、全ての生物が何らかの考える能力を持っているように思えてくる。

動物は、生きるために、あらん限りの知恵を振り絞って動き回る。植物は、一旦大地に根をはると、与えられたその場の環境で生涯を全うする。植物が生息する環境は、温度、湿度、光量、雨量、地下のミネラルの状態などが、常に変化しているので、植物は、これらの環境変化に即座に対応すべく、全身のセンサーを研ぎ澄まして反応している。時には種子となって休眠状態になり、何万年も遺跡の中で過ごし、現代に蘇った古代ハスのような植物もある。

樹齢約2000年の神代桜（山梨県北杜市山高）2017. 4. 17伊藤佑子撮影

現在、地球上にはおよそ127万種、確認されていないものも含めると、約870万種の生物が生息していると言われている。地球上の肥沃な土壌1グラムの中には、10億個を超える微生物が生息している。海洋や大気圏を含む地球上には、天文学的な数量の生命体が生息しており、この個々の生命体が自立し、地球環境の変化をキャッチし、個々にとって最善の形で効果的に対応しながら、生命現象を享受している。この個々の生命が持つ生命力がどのようにして生まれてきたのか、無生物が生物に変化する機構については未だ解明されていない。

人間だけが考えているのではなく、全ての生物が考えており、考えることそのものが、生命の本質であると言って良いだろう。逆に、考えない人間は、生命としての尊厳を失うことになる。近年、AI（人工知能）が、いわゆるシンギュラリティ（臨界点）を超えると、1個の生命体として自律し、考え、判断するようになると言われているが、AIは、あくまで人類が創り出した単なる道具の1種でしかあり得ないと思う。